史跡斎宮跡・伊勢街道まちづくり会

編

伊勢街道ものがたり(明和町

竹川~新茶屋)

明和町

ごあいさつ

三重県多気郡明和町 町長 中井 幸充

って行ってこられ、 ップの作成や伊勢街道のカラー舗装化、伊勢街道ウォークなどの事業を会員の方々のご努力によ 本書をまとめられた史跡斎宮跡・伊勢街道まちづくり会では、これまで伊勢街道を紹介するマ 町の活性化にご尽力いただいております。

着した目線で丁寧に拾い集め、 たため、 たおかげで、本書「伊勢街道ものがたり」が完成しました。 参宮者をもてなした品 明 和 町では、 これらを充分に活かしきれていませんでした。しかし、 現在も伊勢街道沿いに多くの住宅が並び、 々や多くの逸話が残されていますが、これまでまとまっ かつての賑わいを今に伝えようと会員の方々が奮起してい それぞれの家にはか これらの貴重 な資源を地 た解説書が つて伊勢神 ただい 宮 な 元に密 か へ の 0

ことは大変喜ばしく、 こうした地域での活動によって、 改めて会員の皆様や関係者の方々に対してここに厚くお礼申し上げます。 町の歴史や文化財が活用され、 次世代へと受け継がれていく

はじめに

史跡斎宮跡・伊勢街道まちづくり会会長 永島 喬

成 時 求 域文化 十分に た祓 行政が協 年を迎えた平成二十六年 合える場とし 十九 代背景を鑑 められ 明 Ш 和 年十一 この没個: 活 など、 町 ています。 働で実践することにより、 かしきれ には、 月に、 み、 性化が 魅 て本会を発足させま 万 全国 平成十八年度に立ち上げた あ ておらず、 危惧され 史跡斎宮跡 私たち史跡斎宮跡 る歴史遺産 唯一の史跡斎宮跡 <u>+</u> 月に 世 つつあ の 中 自 は 伊勢街道を核としたまちづくりについ L た。 地域独自の魅力や文化力を高め、活力ある地域を取り戻すことが . О 然 通算七十回目となりま ります。 玉 遺 ・伊勢街道まちづくり会 をはじめ、 以後、 際 産 が 化や個人主義的価値観 多数 そのため、こうした資源を活 「明日の斎宮を考える会」 まちづくり会は月 あ 伊勢街道 ります。 L 0 た。 町並 L (以降、 カゝ の拡 み、 __ 口 のペ これ 大に伴い、 日 . て のメンバーを母体として、 本 まちづくり会)は、こうした 住民] かしたまちづくりを住民 らを地域 Ď 平成二十七年七 ・スで開 湿 地 行 地 五. 催 政が 域社 住民 00 ï 7 定 会 0 選 お 期 0 資産とし に 崩 り、 的 選定され に 七 語 平 日 周 地 V)

これまでに三十七項目におよぶ

「まちづくりプロ

グラム推

進計

画

をベ

ースとして、

手始めに街道

沿 , , 0) 魅 とめることができ、 力発見調査を行いました。その成果は、「伊勢街道散策マップ」次いで「伊勢街道屋号マップ」 ウォーク愛好家等に役立っていると聞きます。一方、 斎王をテー

校 品 を制 訪 芝居 問等で幅 作 作成 広 自 部会では、 5 V を 公演活動を実施 っか 年 わ せみ 間 _ 座 作品 心してい と称 のペースで構成 、ます。 į Μ 祭ほ またこうした活動にあ か、 脚 斎宮 本 • 貼 浪 り絵 漫ま つり、 いわせて、 演出に至るまで手 1 つきの 伊 勢街道 みや 梅 作 (県 ま ŋ 道 0 による作 ĴΪ

学

(

だくとともに、 文献 調査、 聞き取り調査等を実施し、 街道を案内する際のテキストとしても使える冊子を作ろうということになり、 地区ごとに執筆を分担して皆で内容を検討してきま 現 地

牛

-葉間)

0

カラー

舗装化と側溝整備

も行われ

ました。

成二十四年度

からは、

伊勢街道にまつわる遺産やエピソードについて、

地元の方々に知

ってい

た

調

 \mathcal{O} そしてようやくここに 一助となることを願 ってやみませ 「伊勢街道ものがたり」を刊行する運びとなりました。 ん。 本刊 が ,地域 0 魅力発信

組 は 最 後に、 決 L てスピ 自分たちでできること、やりたいことからまずやってみようと始 デ / イ | -ではあ りません。 L か Ļ 着実にその 成果が 見えてきたことで、 まっ た会です が、 活 動 その \mathcal{O}

皆様 欲や 方 自 パのなお 信 が 沸 一層のご支援ならびにご協力をお願 1 てきて V ま す。 今後もこの会は継 V) 続 してい 申し上げます。 きた いと考えていますので、 様 々な分野

0

意

取

十 五	十四	十三	<u>+</u> <u>-</u>	+	+	九	八	七	六	五	四	三	=	_	伊勢先
齋宮郵便局・・・・・・・・・・・ 27	旧家 田所家(傳與門)・・・・・・・・ 25	大森座・・・・・・・・・・・・・・ 24	御殿 旧家高木家・・・・・・・・ 23	「立場茶屋」竹川の島村家・・・・・・ 22	報徳社・・・・・・・・・・・・・・ 20	花園学校・・・・・・・・・・・・ 19	山之庵・・・・・・・・・・・・ 18	芝の増上寺の客員・佛学者、森島十玄斎・・ 17	郷土の偉人 森島陳明・・・・・・・ 15	竹神社跡・・・・・・・・・・・・ 13	祓戸跡・・・・・・・・・・・・・・12	花園旧跡・・・・・・・・・・・・・10	祓川の渡し・・・・・・・・・・・・9	竹川(祓川)・竹川の橋 ・・・・・・ 8	街道の概要・・・・・・・・・・・・ 7
三 十 一	三十	二十九	二十八	二十七	二十六	二 十 五	二 十 四		<u>-</u> + 	<u>-</u> + -	<u>-</u> +	十九	十八	十七	十六
北野家・・・・・・・・・・・・ 44	絵馬殿・・・・・・・・・・・・ 43	斎王の森・・・・・・・・・・・ 41	野々宮・・・・・・・・・・・ 40	斎宮の関所・・・・・・・・・ 39	斎宮尋常小学校・・・・・・・・ 38	宗安寺・・・・・・・・・・・・ 37	三木亭(南勢旅館)・・・・・・・・36	宇志葉神社 (八王子)・・・・・・・35	観音寺・・・・・・・・・・・・ 34	警察署・・・・・・・・・・・・ 33	曽我蕭白の襖絵・・・・・・・・ 32	永島家 (分家)・・・・・・・・・ 31	永島家(本家)・・・・・・・・30	乾家・・・・・・・・・・・・・ 29	齋宮村役場・・・・・・・・・・ 28

四十八 新茶屋の弘法さん・・・・・・・・4	四十七 八柱神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	四十六 田丸城の門・・・・・・・・・ 61	四十五 三忠の擬革紙・・・・・・・・・・・・	四十四 秋田屋事件・・・・・・・・・ 5	四十三 新茶屋の沿革・・・・・・・・ 5	四十二 街道沿いの営み(下有爾界隈)・・・・・6	四十一 史跡水池土器製作遺跡・・・・・・・ 5	四十 オンバサン・・・・・・・・・ 54	三十九 転輪寺・・・・・・・・・・・ 2	三十八 そうめん坂・・・・・・・・5	三十七 仲神社・・・・・・・・・・・・5	三十六 明星水・・・・・・・・・・・・・・・	三十五 安養寺・・・・・・・・・・・・ 48	三十四 明星茶屋・・・・・・・・・・ 47	三十三 下郷の庄屋、須賀家・加藤家・・・・・16
64	63	61	60	59	57 明和町発行	56 明和町史編纂委員会 二〇〇四『明和町史 史料編 第一巻』	55 郷土文化を守る会、明和町教育委員会発行	54 明和町郷土文化を守る会 二〇〇一『里の史跡散歩』明和町	52 三重県郷土資料刊行会	51 野村 可通 一九七六『伊勢の古市あれこれ 道歌の巻』	50 明和町史編集委員会 一九七二『明和町史』明和町役場発行	49 齋宮商工会 一九三五『齋宮村郷土誌』齋宮商工会発行	48	47 引用も行った。	46 本書の内容にあたっては左記の文献を参考にし、一部内容の

三十二 六地蔵石幢・・・・

: 45

伊勢街道の概要

このル 斎宮を経て伊勢に至るおよそ十八里 伊勢街道は、 ートでは、 兀 近世をむかえ伊勢参宮が活発になると、参宮客へのサー 日市 の日永の追分で東海道から分岐し、伊勢湾岸沿いに南下して、白子、 (約七十キロメートル)の道で参宮街道とも呼ばれてい ビスを提供し、 津、 もてなすた ました。 松阪、

めに、 街道沿いに集落が発達し、 天正十六年(一五八八)、蒲生氏郷の松坂入城とともに、
ボルルルラ 物資や文化、情報が行き交い大いに賑わ į١ ました。

明

和

町内では、

られたことにより、 字古里(現坂本集落の南)の人達が、街道筋に移り、 参宮客相手の商 いをするよ

うになり、

茶店、

旅籠、

土産物屋等が営まれるようにな



道標(従是外宮三里)

が # ŋ 並び 葉、 ました。すなわち、 きす。 中町、 勝見、 上野、 松阪 下有爾、 側から順に、 新茶屋とい 竹川、 った集落 金剛 坂

九)に国道から県道となりました。 現在 の道幅 は約六メートルで、 昭和三十四年 (一九五

伊勢街道が南に付け替え

竹川 (祓川) ・竹川の 橋

が 今は 両 竹 大神宮に参向される際にまず竹川で禊をされるの Ш 元 櫛 (献) 0 田 櫛 ĴΪ 『川)は、古代「多気川」「竹河」「近河」「金河」とも呼ばれました。 田 の支流で川 ĴΠ は ほ んの小さな溝川だったと伝えられています。 幅 も狭いですが、 古代はこの 川 が例であったので、「祓川」とも呼ばれたのです。 が 本流 で、 字 それが、 荊 原 帯 永保二年 (一〇八二) 七 が 斎王及び勅使斎官等 Ш \mathcal{O} 中 州 であったら



祓川橋(昭和7年2月)



昭和39年頃の神宮橋

橋」

が

あ

0

た場所ではなかろうかとも

推定されています。

急に水勢が 向 なく、それより北方の に架かっていたそうです。 神じ 竹川 Ш | 宮橋 原 0 細 橋 通じる小 は、 がおそらく、 くなっ 今の たとい 道に 祓 字 ĴΪĮ 架かっ カュ 祓 わ 橋 つて 昔、 戸 れ \mathcal{O} 位置 0 7 て 竹竹 竹 あ V 一では ます。 1 ĴΪ た 川 た 0 ŋ

田

Ш

が

形成され、

祓

ĴΪ

の方

は

二一祓川の渡

冬か 船 天 ら春 12 正十六年(一五八八)、参宮街道が南に移設され新街道が開通すると、紀 ょ n に 橋賃 カ けて 船賃 0) 渇 を徴 水 期 には、 収 て 船 11 ま \mathcal{O} した。 上 元に仮 \mathcal{O} 板 橋 を か け、 また夏か 5 秋 州藩 12 か は け て 祓 Ш \mathcal{O} 増 を渡る部分に、 水 期 に は



稲置川(祓川)『伊勢参宮名所図会』

また、江戸時代の末期、仮橋を架けた祓川では、渡船賃の

代

わ

渡

りに (一八八〇) 橋銭を徴収 頃には、 してい ま 人は二厘、 した。 ちなみ 人力 車は んこそ 六 の 厘 賃 率 荷 は 車 明 牛 治 十三 馬 は 兀 年

厘でした。

なお、現在の祓川橋は昭和四十一年に完成したものです。

三 花園旧跡

花園 祓 旧 Ш 跡 の東、 の碑があります。これは、 百メートルのところ、 近鉄線路の傍らに僅かあまりの小高い草生地があり、 大正十五年(一九二六)に花園旧跡保存会が、 かつて斎王に関係 樹木の下に

『斎宮村郷土誌』によると、

あ

る花園

の昔を偲び、

遺跡を永久に保存するために建てたものです。

少女たくへて』 に竹川の戸長が度会県に提出した『調書』には、 !馬楽』にある歌『竹川の橋の詰なるやいばら は有名で、 史書に通じた人々のよく知るところである。また、 橋の詰なるや 祓川の東にある田の中にある森に花園旧地と伝わる 花園に はれ花園に 明治三年 (一八七〇) 我をば放てや

ところあり、 この 地の字名も花園である。 現今、 花園 旧跡保存会なるものが標石を建て、 椿、 桜 の若

木を植えてその保存顕彰に努めている。」とあります。

が が 面 あったことを示唆しています。 があり、 源氏 源 氏 物語』 物 語 「竹河の橋詰めの花園に、 の竹河 の 「竹河」 0 段 の名の の巻に、 由来とされています。「竹河」は祓川のことを指し、 その名残が花園跡として伝承されてきたものと思われます。 私を女の子と一緒に放してほしい」という歌が 藤侍従と呼ばれる玉鬘とうのじじゅう の三男が 「竹河」という催馬楽を歌う場 登場します。 その近くに花園 これ



花園旧跡の碑

花紅葉を集め植えたる跡なり。」とあります。 名あり、是は、斎の内親王の御心を慰め奉らんとて、いっぱいではいいのかのである。 また、 このほか、『伊勢旧跡志』 花園のことは、『勢陽雑記』、『倭訓 栞』、 には、 「竹川の小橋の前に 『伊勢名勝 兀 花園 時 0) 0

ともあったであろうと記されています。

催馬楽の歌などによっても知られるから、

斎王は御つれづれのままに、

時々この地に足を運ばれたこ

(祓川)が流れていて、その畔に花園があったことは

"大神宮史要』には、

斎宮の西方には竹川

四 祓戸跡

た。 呼ばれるようになったものと思う。古代の街道は、 れている。今、竹川の西北にある祓川の右岸に祓戸と称する字名が残るが、これは祓殿からなまって 場所を古くは『祓殿』と称した。この祓殿のことは、『延喜斎宮式』や『伊勢大神宮参詣記』に記さ 旧 また、 斎宮村 竹 神社跡 斎王は伊勢神宮の三節祭に参向する際、尾野湊になせてきい。 郷土誌』によると、「斎王が群行し斎宮に入るに当たり、 0 標柱の前の小道を少し行き左に折れた三十メートル先に「祓戸跡」の標柱があります。 高木(松阪市)から神宮橋のあたりで祓川を渡っ (大淀) とこの地で 禊 祓を行った。 竹川 (祓川)で堺川の祓えを行っ その

宮神事考證附録)』では、 かし、 この祓戸の位置について、『勢陽雑記』は、この標柱のある場所として、『斎宮寮廃跡図 旧竹神社跡のすぐ西にあるとしています。おそらくこの二書は字祓戸の存在 神

祓戸、花園を通って古里に出たとするのが、地理的にも当たっていると思う。」とあります。

に気付

か

なかったことが窺えます。

て、

す。 い なお、 ず 'n にしても、 現存する字祓戸は、 この 祓 戸 (祓殿) 標柱から少し西へ行った水田を一望できるところから、 跡の位置につい ては、 後学にゆだねざるを得ないかと思わ 正面やや左あ れま

たりに見える祓川沿いの木立の下です。

五 竹神社跡

斎宮歴史博物館 南公園駐車場の南の小道を西に行った山林の前に標柱があります。

氏 支配した。この竹氏がその氏祖の神を祀ったのが竹神社である。しかし、祭神は『古語拾遺』に云う麻績 に任じられるとあり、竹氏と斎しく多気郡を領していたことなのであるが、後世このことを誤り信じ の二ケ村を奉ったとされる宇加乃日子とその子吉比古の子孫が代々多気の連と称して多気郡のの二ケ村を奉ったとされる宇加乃日子とその子吉比古の子孫が代々多気の連と称して多気郡の の祖 「斎宮村郷土誌』には、「竹神社は俗に『桧 木宮』と称した。 .『長白羽神』とされている。これは『内宮儀式帳』に大化二年 (六四六) 麻績氏が多気 評 督 領 ばまからはのかみ 倭姫命の伊勢巡幸の時、 櫛田、 地 を

を祭神とする。 の国と解し祭神を竹田臣の祖大彦命とする説は誤りである。この社が産土神社となってからは、 また、『伊勢式内神社検録』には、「この社は 八王子も祭っていたともするが八王子は、この社の南にある若宮社の祭神である。」と 『斎宮式』に云う竹上社である。 また、この地を竹田 天王

麻

(績氏の祖を祀ったものである。) とあります。

竹神社 なお、 0 この地にあった竹神社は明治四十四年(一九一一)に現在の竹神社に合祀されています。 祭神が麻績氏の祖か竹氏の祖かについては、 今後の面白い課題の一つです。 あります。



旧竹神社跡石碑建立式(昭和16年)

六 郷土の偉人 森島陳明

す。 森 宝暦四年(一七五四)に金剛坂に生まれた陳明は、 島家初代三右衛門由門 の三男清右衛門宗定が、分家 博学多芸で特に佛学に造詣が深く、 (向屋敷) し、それから四代目が嘉平次陳明で 各地 0 知

識人たちと研究を重ねていました。

また印版士髙芙蓉に師事して閑竜斎と称して篆刻(木石などの材料に印として文字を彫り付けるこでである。 の技を学びました。その優れた篆刻技術によって、かつて有栖川宮家の印璽を篆刻してお褒

あずかったことがありました。

珍重され、「陳明焼」と称しました。万古焼、 また楽焼にも興味をもち、その作品はとても風流なもので、 安東焼、 時中焼と並んで伊勢四窯の一つに数えられてい 独特の趣きがあったため、 茶人の間 に

ます。 その他書画にも堪能で逸品多く、 謡曲もよくしました。 ようきょく

このように陳明は、 漢詩、 和歌、 陶芸、 茶道、 南宗画、 謡曲など、 諸芸に通じ活躍した郷土の偉 人

です。

文政十三年(一八三〇)七十七歳で没しましたが、 金剛坂墓地の墓石に、 辞世の句が刻まれていま

す。



「陳明焼 花生」(渡邉幸宏氏所蔵)



森島陳明 墓石

七 芝の増上寺の客員・佛学者、 森島十玄斎

森島専吾由文は、江戸に出て芝の増上寺の門を叩き、ここで長年佛学の研鑚に励みました。

世紀 ごまじょう 佛学研鑚の成果の一つとして『華厳探玄記』を著わしました。 佛学では「十玄斎」と号し、

また儒学では 「南陽」を名乗りました。

後年、

金剛坂森島家墓地の歴代当主の墓石に並んで、十玄斎の佛学研究書の草稿塚があります。

なお、十玄斎は陳明の叔父に当たる人で、墓石には、「龍口

十玄斎賢首居士」「龍口隠士

舊華墓

と刻まれています。



草稿塚

八 山之庵

山之庵は、金剛坂集落のほぼ中央にあった曹洞宗のお寺で、創立年代も住職も詳しくは判りません。ゃまのまた

(一八六八) に他の寺々と一緒に廃寺となりましたが、寺号も建物も引き続き永らく残っ

ていました。

明治元年

明治八年(一八七五)から明治十一年(一八七八)までは、『金剛坂学校』の仮教場となって土堤道

気郡高等小学校に通学する遠隔子弟のために、 場にあっ た郷学校以来の生徒を収容しました。また、明治十八年(一八八五)頃から坂本にできた多 寄宿舎として開放していました。

明治二十年(一八八七)になって、 寺号は一志郡阿坂村 (現在の松阪市阿坂町) へ、建物は北勢某

寺

へ移転し、その跡地に正木綱太郎氏が医院を建てて開業しました。

- 18 -

九 花園学校

(正木家の庭園春秋園)に校舎を新築し、これに移りました。そして明治十五年(一八八二)八月に 金剛坂集落内の山之庵で開設された『金剛坂学校』は、明治十一年(一八七八)五月、竹川の西部

治十八年(一八八五)には校舎が増築され、『坂本学校』をも合併しました。 は大日寺の『上村学校』、大儀庵の『池村学校』を合併して『花園学校』と改称されました。また、明

明治二十年(一八八七)、学制の改正に伴い、花園学校は、尋常資格の小学校となりました。

い、元花園学校の敷地は、医師正木鋼太郎が譲り受けて、旧態の築山、庭石等を保存して『春秋園』 その後、明治四十一年(一九〇八)四月、斎宮尋常小学校と花園尋常小学校が合併されたことに伴

と称しました。

- 19 -

十 報徳社

創設され 氽 その後、 剛 坂 ました。 0) 報徳社 明治二十二年 (一八八九)、 当時、 (組) は、 定治郎は二十七歳、 明治十九年(一八六六)に櫛谷定治郎 斎宮村村長となり、 しかし既に二十四歳の時 大正十四年 (一九二五)、 (一八五九—一九二五) から金剛坂戸長を務め 在職 そい によって 中に亡く ま

なるまで三十八年間村長を務めました。

が、 て報徳社 幕末期に活躍 たことがありました。その時、立ち上がったのが櫛谷定治郎で、当時疲弊した金剛坂を立て直すには 金 剛 ある数年間、 坂集落 を組織し、 した小田原の二宮尊徳(一七八七―一八五六) は伊勢街道に沿い、 戸長にその人を得ず、人心乱れ、 まず社員に耕地を所有させて恒心を培うことを計画しました。 農業の傍ら旅客相手の商売をする人達が住み生活を営んでいました 倒産する者が続出し、 の教え報徳主義に基づき、 集落の前 つまり山 途が大変心配され 区民を説 林を等分

せました。 て開墾させ、 畑を造り、 その所有権は報徳社に保留して、 耕耘利潤は永代無償で社員各自に習得さ

じて寄付させたものを充て、 経費に つい ては、 社員 の積立金と冠婚葬祭の儀礼中虚 人々に勤倹節約と勤労の尊さを実感させ、 飾に渉るものを節約させて、 その後も同様の方法で、 資産 0 階 級 明治 に応

十九年 (一八八六) から大正四年(一九一三)まで共 同開墾を続けました。 畑は社員一人当たり二反

六畝余歩になりました。 また田も買収し、 社員に小作させました。

規定に準じて見舞金、

無利子

の貸付

また、 香料を贈り、 社員および家族 福利 \mathcal{O} 充実を図ってい の病気、 怪我、 ます。 風害などの困窮に対し、

ま た、大正十二年 (一九二三)には、農作業の 機 械 化 に 向 けて石油 発動 機 (、精米精麦機、 大豆粕粉砕機だいずかすぶんさいき

麦圧片機、 大正十三年 (一九二四) 稲籾機、いなもみき 籾摺機、 には、 製縄機などを共 農業用牛馬、 同 肥料 購 入し 購入代金 て ます。 の貸与規定を設け、 低利で個

どを行っていました。

報徳社 の下、 勤 労の大 、切さを説き、 生活 の安定、 福 利 \mathcal{O} 充実、 農業 0 振 興、 集落全体とし ての繁栄

表徳の碑

安定に大きな働きをしました。

12 ŋ あ 金 報 徳社 り 剛 ま 坂 集落 0 創 77 \mathcal{O} 者、 中 -を南 櫛 谷定治 へ約二百メート 郎 0 表 徳 ル \mathcal{O} 碑 余り入ったところ は、 伊 勢 街 道

ょ

人に貸付な

十一 「立場茶屋」竹川の島村家

来た娘が、帰路、 竹川 島 村家は、 0 「立場茶屋」は、 長年この 竹川辺りで病に倒れていたところを、 「立場」を管理し、 江戸 ,時代に街道を往来する駕籠や荷馬等の休息や交代をした処です。 庄屋も勤めました。 島村家はその娘を三ヵ月程も養生させ、 ر را つの 頃 か、 九 州臼杵から伊勢参宮に 快復

した娘を道中手形の手配までして見送ったという逸話が残されています。 今もまだ漆の香るような椀や膳、 火鉢等が多数残されていて、これらの漆器類の手入れをしている

と

当時

0)



漆膳盌 (天保 4 年(1833))



漆重箱 (寛政 6 年(1794))

御殿 旧家高木家

竹川 中 町にある御殿と呼 ばれた旧家高木の邸宅は、 現在、 鈴木氏の所有となってい 、ます。

敷地も以前は高木家が所有していたと言われてい 高 木家 ・ます。 また、 また、 屋敷地についても、 西側 は 治郎 御糸道まで高木家の屋 右衛門を称 現在 所有 かし、節齊、 の北 島 敷 医院 慎産い 地 で 0 あ 屋

たと言われています。 久良人は、文化十四年 (一八一七)、紀州に 生まれ、 のち高木家の婿養子とな

当地で疱瘡が流行した際、 られることもあったので、 なりました。 りました。 蘭学を長崎で学んで洋医に通じ、 その関係で、 界隈で種痘の法を心得てい 御殿造りの邸宅を構えてい 田丸藩主久能丹波守が、 紀州候 時 田 たの ました。 丸 々駕籠で立 藩 は唯一、久 0 御典医と なお ち寄

良 十三年九月十日没」とあります。 人だけでした。竹川墓地にある墓石には、「高木久良人墓」、裏面 道は、 明治十四年 (一八八一)、 に「明

を発揮しました。墓石には、正八位勲八等と刻まれ、 木家 へ入り婿となり、 多気郡役所に勤め 首席書記として 祀られてい 郡 政 ・ます。 E 手腕



御殿 旧家高木家(昭和初期)

高

大森座

森座)を経営して、巡業芸人を招いて次々と芝居や浪曲を開演していました。 明治三十二年(一八九九)の頃から、 大字竹川の高木宗次郎が講元となって講社を組織し、劇場(大 聞くところによると、

この劇場は、伊勢古市の劇場に匹敵するほどの立派なもので、盛況であったと言います。

劇場は今の北島医院の敷地にあり、一度風害のために倒壊し再興されましたが、 鉄道の普及に伴い

次第に街道を通過する参宮客が遠のくに従い、明治四十年(一九○七)頃、解散してしま いました。

なお、 街道の筋向いにも簡易な回り舞台を備えた「中川座」という芝居小屋があったそうですが、

詳細は不明です。

十四 旧家 田所家 (傳與門)

三代目傳與門は、 傳與門家は、 延宝年間 江戸の堀木店に勤め、帰省後、 (一六七三 - 一六八○)、初代三蔵が江戸より当地に来て創立した家柄です。 享保四年 (一七一九) から菅笠、大豆、干鰯等の

商売を開きました。

寛政年間(一七八九 - 一八〇一)、四代目傳與門の時、藤堂藩主より農業の肥料受給のため、肥料商ややは、

を命ぜられています。 七 代 目傳與門は、 天保十一年(一八四〇)生まれで、幼名を勝次郎といい、 伊勢から菅笠を、北海道から干鰯を買い入れ、代々家運を振興しま 資性、 温 厚篤実で、 新

しい蔵や屋敷を建てました。

〇六)に肥料 八代 目傳與門は、 の製造を開始しました。また、 慶応三年(一八六七)に生まれ、 刻煙草の製造販売も行ったほか、 父にもまして商売熱心で、 明治四十二年 明治三十八年(一九 二九一

()には 伊勢表の問屋業を開業し、 大正十四年 (一九二五)には、大淀にあった倉庫を相可口に建て

た。 昭和二年に没しましたが、 田所家 の中興の祖というべき人でした。

役を務め、 九 代 目 \mathcal{O} 退職 誠 は、 後は北野の一二八部隊跡に近畿製紙株式会社を設立しました。 慶応大学理財科を卒業し、 勢南 銀行に入行。 その後、 百五 銀行と合併になり、 重

旧家 田所家

んも祀られていますが、この稲荷は、 田 所家屋敷の奥には鎮守の森があり、 以前 周囲 は字古里にあり、 は静寂で独特な雰囲気が感じられます。 現在の斎宮歴史博物館入口に整備保存さ また、 お稲荷さ

れている塚山二号墳の上に祀られていたものです。

十五 齋宮郵便局

便 二月に た。 取 明 扱 治 は 明 役 七 その子 に任ぜ 治 年 + 七 年 木 6 八 戸 れ 七 四 口 7 郵 久 八 三月、 太 八 便 郎 四 集 が 配 齋宮 九 事 大字 月、 務 郵 を 斎 宮五 便 取 木 声 局 ŋ 十五 長 扱 \Box に 久 うことに 番屋 任 八 命 が され 一敷に 郵 な 便 Ď, てい 取 『齋宮 扱役 ま 캪 す。 とな 郵 八 年 便役所』 Ď, 明 月 治二十八 明 \neg 治二十 齋宮 が :設 年 置 郵 っされ、 便 年 局 八九五) 十二月 と改 乾 八 周 八 称 次 され 郎 が + ま 郵



齋宮郵便局落成記念写真(昭和4年)

えて、 れ、 に は、 島 大字 内 村 半 玉 竹 電 七 信 が 川 事 局 五. 務や 長 + 12 七 任ぜ 電話 番地 5 通 屋 話 ħ 敷 ま 事 (現· 務 した。 在 Ł 取 の二四 そ ŋ 扱うように 0 後、 八 番 地 郵 便 な 集 に ŋ 配 局 ŧ 事 舎 務 が た。 に 移

れ れ 築移 が 転 続 ま て 昭 L 転さ け 和 L 7 6 た V 匹 ま ま れ、 れ が す。 年 す。 六 7 さら V そ な 月 Œ ま お、 \mathcal{O} は、 0 に 後 平 間 昭 Ł 街道 個 成 和 四 人経 五. 局 年 名 + 0 三年 営 \equiv は、 斜 \mathcal{O} 月 8 九 明 斎 に 向 朔 眀 月 和 筋 に 町 和 郵 0 竹 竹 郵 便 軒 川 便 局 川二七二番 簡 西 局 明 易 側 は 郵 北 和 0 便 野 現 郵 在 地 局として業 便 新 局 12 0 築 と改 場 局 移 所 舎 転 称 に が

務

3

3

移

新

加

3

十六 齋宮村役場

その間、 が初代村長となり、同家の菩提寺である観音寺の堂宇を村役場に貸与して行政事務が開始されました。 明治二十二年(一八八九)の町村制実施に伴い、七つの大字を抱合した新齋宮村が誕生し、 明治二十二年十月、櫛谷定治郎が二代目村長を引き継ぎ、再選されて三十八年間も勤続されました。 明治三十一年三月、齋宮牛葉組が観音寺の旧堂宇を上御糸村大字佐田へ売り払い、 その跡 地



旧斎宮村役場

に村役場と登記所を新築して貸供しています。 その後、 齋宮村役場は、 明治四十二年(一九〇九)二月、現

さらに大正十四年(一九二五)七月、新庁舎が建てられました。 斎宮小学校前に移築された花園学校の旧教室で執務が行われ

十七 乾 家

引き連れ、一志郡の多気の城から落ち延びてきて、斎宮寮跡の南部を開拓し、 斎宮 寮が廃絶したのち、天正四年(一五七六)に国司北畠の家臣 乾覚助源休が、 西堀木郷 その家来十八名を (現在の牛

と称し、この地に永住し庄屋となります。



乾家 (昭和初期)

源休は、 寛永四年(一六二七)に没しましたが、その後、 明治 廃

藩に至るまで八代の間、 覚左衛門を称し、 慶長支判株の庄屋として

産業の開発等に尽くしました。

乾家は、

当初街道

の

北

側

現在

の百

南側に住居を移し、その西側に店を建て、「たばこ入斎宮い Ŧī. 銀行あたり)に住居を構えていましたが、 江戸時代中 期 に街道 ぬい」の 0

明治の初めころまで紙煙草入れの製造、販売を行

看板を掲げて、



「たばこ入」看板

っていました。

十八 永島 家 (本家)

伊勢 の国司、 北畠の家臣の四代目、 永島丈右衛門錦次 (遊賀) が享保年代 (一七一六~一七三五)

に山田 明和元年(一七六四)、当家に滞在した曽我蕭白は、 (現、 伊勢市)妙見町からこの地に移住し、 西 堀木郷の庄屋となります。

四十四枚あまりの襖絵を描き、

現在、これらは

玉 .の重要文化財に指定され、三重県立美術館に保管されています。

永島家(本家)(昭和初期) 七月七日、九日に明治天皇が伊勢神宮に行幸された時、往路、

明治二年(一八六九)三月十一日、十三日と明治十三年(一八八〇)

当家で御小休されています。 また、明治二十年(一八八七)三月六日に

は、英照皇太后も御小休されています。



蹲踞

現在、 明治天皇が使われた蹲踞 紋付き手洗い)が残されています。 永島家の庭には、 その時 (菊 の御

復路とも

十九 永島 家 (分家)

永島丈右衛門錦次 (遊賀)の次男、 源右衛門敬次は、 明和 六年 (一七六九)、 錦 次から家財 田 畑 \mathcal{O}

分を譲り受け分家し、 文久三年 (一八六三) 「和泉屋」と号して酒造業、 には、 勅 使 の柳原光愛、 藤波教忠、 小間 物店 橋本実染の三人と南 旅籠を始めました。 画 家 Ò

『伊勢参宮名所図会』 「和泉屋」 より

永島 (分家)

なお、

源右

衛

門源作を称し

て代

々、

酒造業を続け

7

まし

日 間 程 宿泊されており、 その 時 描 カ れた風 景 画 が 掛 け 軸とし

谷

 \Box 靄いざん

が

五.

兀

て残されています。

が、 明治二十年 (一八八七) 頃に廃業しました。



谷口靄山が描いた風景画

曽我蕭白の襖絵

7.蕭白が永島家に大量

 \mathcal{O}

襖絵を残すことになったきっかけになる出来事が、

桃沢如水という人物ももざわにょすい

が 明治末に集めた曽我蕭白 の逸話集に書かれています。



「竹林七賢図」(三重県立美術館所蔵)

浄顕が、 の頭のあたりに頭陀袋と筆が 来ると、 れによると、 外出した帰り道に、 一人の青年が路傍に打ち倒れて、 明和元年 (一七六四)、 金剛 坂 の下ま 永 そ

で

島

揮うことになったのです。 に家に を聞 俺は 当 きなくなったから寝ているのだという。 時 新 V 画家だが空腹のために、 連 築になっ ては捨てておくわ れ帰ることとなりました。その たば カコ りの けに 同家の襖に彩管を もい もはや歩行もで いかず、 あと、 これ 親

切

同

ほ

り出してあ

たので、親切に呼び起こして聞いてみると、

一十一警察署

相 が設置され、八名の羅審 可 明治二年(一八六九)、 櫛 田 (T) 両 屯 所に駐在する各々二名の羅審をも統括して、 廃藩置県の後は、斎宮村の和泉屋(永島分家)の東屋敷に羅審屯所 (巡査) が駐在して、参宮道者の取締まり、監視等を行っていました。また、 山田、松阪間の中部警察機関としての

重要な役割も担っていました。

には、街道向かい側の観音寺敷地内(現、 設置され、五ケ谷、 ところが明治十二年(一八七九)に相可村が多気郡の中心となり、多気郡役所と共に相可警察署が 川添以東の多気郡を管轄するようになったことにより、明治十三年九月、斎宮村 高森歯科医院地)に「斎宮巡査交番所」が設置されました。

活を図るために、 可警察署斎宮村巡査駐在所」と改称されています。 そして明治十九年(一八八六)一月には、「斎宮巡査派出所」と改称され、明治二十年には、さらに 本村の有志者の拠出金を以て警察電話が特設されました。 なお、大正五年 (一九一六) には、 警察事務の敏 相

月に竹神社西側へ移転、 その 後 昭和三十四年 平成十七年(二〇〇五)四月には現在の明和町役場東に移転し、 (一九五九) 四月に 明和町斎宮駐在所と改称、 昭和四十九年 九七四) 一 名称も松阪

警察暑明和交番と改称され、現在に至っています。

二十二 観音寺

寮跡の西南郊外、最勝寺に創建したのが観音寺です。 天正四年 (一五七六)、 西堀木郷 (牛葉) を草分けして土着した乾源休が、その菩提寺として、斎宮



観音寺が記載されている絵図

延享2年(1745)

七九五)、乾家の屋敷の東北(現、牛葉公民館の地)に移転

源休から六代目覚左衛門守義の代になって、寛政七年(一

され、一層立派な寺となりました。

明治元年(一八六八)に廃寺となり、

寺に移されましたが、明治五年(一八七二)から四年間は、

元斎宮小学校の仮教場として使われていました。

本堂は佐田の清光

二十三 宇志葉神社 (八王子)

て連ねて西堀木郷が生まれたので、さっそくこの跡地をそのままに社殿だけを造り替え、 天正四年 大字斎宮牛葉組 (一五七六) に斎宮寮の外院の跡地 の産土神で、今の牛葉公民館の西北にある秋葉神社と庚申堂の北方にありました。 の南方を開墾し、 新しく開通した伊勢街道に民家を建 産土神とし

境内は明治元年(一八六八)に廃寺となった観音寺と社寺共有だったので、 社殿は境域中の西方、

即ち乾世古

(坂本道)

の傍らに押し移された形に

て奉斎したものです。



宇志葉神社の石灯籠 (現在は竹神社にある)

されました。

なっていました。

元は八王子と称したのを、明治二年(一八六九)パール。

明治四十四年(一九一一)に現在の竹神社に合祀に字名に因んで宇志葉神社と改称され、その後、

二十四四 三木亭 (南勢旅館)

館を開業し、 明治のはじめごろ、 一時はかなりの客を取って賑わっていました。国松の死後、長男一が父の後を継 大字斎宮牛葉の森下国松が、 苗字の「森」の字を割って「三木亭」と名付けた旅 で、

宮に向かう参宮客が減少したため、 「南勢旅館」と改め、 宿泊客が寂れ、 遂に昭和九年の夏に廃業となりました。

参宮客を相手に中々繁盛していましたが、

国鉄や近鉄が開通し、

徒歩で伊勢神

廃業 の翌年には森下家は四日市に移住したため、 現在では当時 の建物はありませんが、屋敷地

奥に、

国松の妹である森下きくが開いた、

分家の森下家があります。

の南

二十五 宗安寺

脱大和尚が開創されました。 当寺は、 伊勢市宇治中之町にあり、 宝暦の頃 正保四年(一六四七)、増上寺二十一世弁蓮社業誉上人還無空 (一七五五年頃) 紅蓮社謙誉法憧上人隋阿泰善大和尚中興とな



り、 当時の基礎を固めました。

明治元年(一八六八)、中川進誉の時廃寺となり、のち知恩院説 本多進海の時

教所となりましたが、明治二十一年(一八八八)、

伊勢市中之町から中町の称名寺 (現在の宗安寺) の跡地へ復活さ

せました。

明治四十三年(一九一〇)栄誉隆定の時、 庫裡が建てられ、

大

二年に本堂等が新しく建て替えられて今に至っています。 正九年(一九二〇)に本堂の大修理が行われました。そして平成

二十六 斎宮尋常小学校

観音 明治 寺 五 \mathcal{O} 建物を校舎として、「齋宮學校」 年 (一八七二) 学制頒布と共に、 が開設されました。 当時 の戸長であった永島源作の主唱により、 斎宮字牛

明治 깃 年 $\widehat{}$ 八七五)に校舎は斎宮字中西 の称名寺 (今の宗安寺) に移された後、 明治十五

に

八八二

に中

西の中

央北裏の蓮光寺

の焼跡に

二階建

0

新

校舎が建てられここに移りました。

この

建築

要した用材は、 野 々宮 (今の竹神社) 境内 の老杉を払 い下げて充てられたものです。

(大正5年) 斎宮尋常小学校

廃 年 の時、 止されました。 (一八九二) 明星村 に明星村にも小学校が 全村 その後明治四十一年 か らの児童教育の 委託を受けまし 置かれたことに伴い、 (一九〇八) 四月、 たが、 齋宮 委託教授 明治二十五 花 袁 は 両

そ 竹 校を合併して『斎宮尋常小学校』 Ō 崩 後、 両 区 学 0 校 境で 0 名称は、 ある現位置に新築し、 斎宮国民学校 を設立することとなり、 翌年七月、これに移転 (昭和十六年)、斎宮村 校舎を斎宮 斎 宮 ました。 小 学校

学校 昭 和二十二年)、 (昭和三十三年) と変遷し現在に至ってい 斎明 村立斎宮小学校 (昭 和三十年)、 ・ます。 明和 町 立 一斎宮小

二十七 斎宮の関所

勢地 中 世 域を支配 の斎宮 してい 地内 0 街道 た北畠氏が指 のようすを知る資料として、 示した行政文書(判物・ 伊勢参宮の旅人が書い 奉行人奉書など) が た参詣 あ ŋ ま 日記や、 当時、 南

寺 であ 斎 宮 る 0 関 田た 宮寺 が初め 宝 て文献 城町 宮古)の造営資金調達を名目として、 に あらわれ るのは、 長禄二年(一四五八)で、 伊勢国司 伊勢内· 7北畠教1 宮 具の被官丹生 \mathcal{O} 神 主 荒 木田氏 寺 귪 実宗 の氏

が 代官を入れてい 、ます。 また寛政五年 (一七九三)には、 柳原殿という人物が、 神 宮造営 0 ため斎宮

人当たり関銭として十二文を徴収していました(祭主大中臣清忠宛て内宮

に二ヶ所の関を設け、

斎宮の関所推定地 済 と 道 に か 田 瀬

済 道に 禰宜 に カコ 田 [丸方面 の要として関が設けられていました。 比定されており、 窺わ 十五世紀末 加えて、 |荒木田経書状)。この二ヶ所の関所のうち一つは、 せます。 向 新しく かう現竹神社前の交差点付近が有力視されてい 頃 こ の 0 「金剛之坂関」(『古和文書』) 近世 祓 ように ĴΪ を iz 渡 街道が 河して竹川、 斎宮廃絶 再整備される以前に、 後 斎宮に至る道 斎宮を通過する主要道に は、 金 参宮道から分岐して が 古代 剛 機 坂 ます。 能 カ 0 6 坂 て \mathcal{O} 垣 は 伊 い 内 たこ 勢 地 0 経 古 ほ 区

二十八 野 々宮

が、ここに城砦を築き、 カゝ つて竹神社の社域 、は野々宮と称し、 南勢の溢者数百人と共に立て籠もって徳政の乱を起こし、 弘治元年 (一五五五)、 斎宮の住人野呂三郎 鎮守の森のなかに (野宮とも書く)

元々、 当該 地 は平安時代を通じて斎王の御殿や重要な役所があった場所で、 斎宮寮が廃絶後は神 Þ

祠もあったという伝承があ

ります。

しい森となっていました。 て低い土塁に囲まれた中・小 斎宮跡の きますが、こうした名残が中世の城砦跡と混同され、 発掘 調査によれば、 区 当該地区は、十世紀後半から十一 画に分割されてい た様子を窺い知ることがで 先の伝承が残されて 世紀に カゝ け

(現、 竹神社) 野々宮 が 四十 字斎宮地 進められたことを契機として、 きたのかもしれません。 集めら さて明治四十年(一九〇七) ·四 年 れ、 内の八社が合祀され、『齋宮神社』が造営されました。さらに 九一一)には、『竹神社』も合祀し、 新たに 『郷社竹神社』として整備され、 野々宮には、明治四十二年(一九〇九)、 代になって維持困難な神社の整理

· 合祀

が

明

治

大

二十九 斎王の森

六六〇年間存続した斎王制度は終焉を迎え、 元弘三年(一三三三)十二月、後醍醐天皇の娘、 斎王の御殿や斎宮寮と呼ばれた役所群は荒廃 祥子内親王が斎王にト 定さちこないしんのう ぼくじょう 定されたのを最後に、 の一途をた 約

どり、その跡地は広大な山林荒野となりました。

には、 |伊勢参宮名所図会』や江戸幕府の道中奉行が編集した『五街道分間延絵図』 その後、 斎宮の象徴として「斎王の森」が描かれているところから、 江戸時代にはある程度畑地としての開墾が進んでいたようですが、伊勢参宮案内書である かつての斎宮の存在が人々の記憶 0) 『伊勢路見取絵図』

0

中に生き続けていたことを物語っています。

北 カ 森は、方格地割と名付けられた碁盤目状の区画の北西隅に隣接する位置にあることが分ってきました。 とから、 ら守る神が 西は乾 江 戸 、時代末期から明治にかけての国学者、 斎宮の中心地は長らく斎王の森周辺と考えられてきましたが、 の方角にあたり、 V る所だったかもしれません。 古代の人々は悪い風の来る方向と考えていました。この森は、 発掘調査の進展に従い、 斎宮を悪霊

現在、

斎王

の森の中には、

元神宮祭主北白川房子氏揮毫による「斎王宮阯」の碑や、

昭和四年に三

斎王の森 (昭和初期) 現在はやや東の牛葉公民館の

「齋王宮之遺蹟」碑

舊蹟表彰会」 により建てられたと思われる 「齋王宮之遺蹟北三丁」 と書か れた石碑 が ありましたが、

入口に移設されています。

重県が建てた「史蹟齋王宮阯」の碑があり、 品跡等が 旧参宮街道から斎王の森に至る三叉路には、 :整備され公園となっています。 周 辺 は発掘調査で確認された掘立柱建物、 明治三十六年 (一九〇三) に組織された 井戸、 区 画 「齋宮 溝

道路

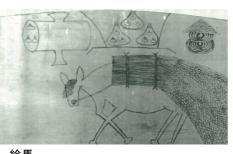
なお、

絵馬殿

りました。大きさは九尺四面 かつて北野天神 に通じる世古の西角に、 (約二・七メートル四方)、高さ一丈一尺で、中に小さな神殿を設け、 荒祭宮の黒木の鳥居と並んで『絵馬殿』と称する小祠があ 絵

の絵馬というは此事を作れる。 伊勢参宮名所図会』には、「斎宮の森に小舎あり、十二月三十一日夜、 昔斎宮に十二月晦日大祓ありて絵馬奉りしを、 絵馬をかくる例なり。 斎宮の儀廃れて後、 謡 絵 曲

馬が奉掲されていました。



絵馬

う噂が広まり、 照大神が出現し、 初めとするか。」と説明されています。 に 相するという内容ですが、いつしか当地においても十二月晦日 しく掛け替えられる絵馬の図葉によって翌年の豊凶を占うことができるとい かける馬を奉りし事の例に成れるにやあらん。又世に絵馬という名は是を 元旦 絵馬を絵馬殿に掲げ、その毛色によって明年 にかけて多くの人で賑わ 謡曲の『絵馬』は、 いました。 毎年節分の夜、 の真夜中に新 Ö 晴雨豊凶を 天

三十一 北野家

北野家は、 元紀州藩 の藩士増田伊右衛門から出ています。

神社のまつりごとを担当する祠 掌 を命ぜられ、更に明治十二年 (一八七九) には、大淀、坂本、 川村郷社竹神社、 の姓を名乗って土着しました。信幸は、明治五年(一八七二)、神社制度が革新されると、直ちに、竹 安政三年(一八五六)、伊右衛門の三男信幸が斎宮村に移住し、北野の天神さんに奉仕して、「北野」 小倉社、八幡社、 宇志葉神社、 楠森社、丑寅社、栃本社、平尾村広橋社、上野村 中海 仲

馬之上、佐田、行部、 根倉、八木戸、浜田、 有爾中、 蓑村の各村神社の祠掌をも兼ねていましたが、

明治四十年(一九〇七)に病死しました。その後、信彦・信敏・信章と三代続けて竹神社の宮司をされ

ていました。

- 44 -

三十二 六地蔵石幢

中台、 高さ一九四・五センチメートルの砂岩製の石幢です。笠の一部を欠損している以外は、 竿、 基礎は完存しています。 竿に「永正癸酉(一五一三年)卯月日」の銘があ ŋ, 宝珠、 ゆったりとし

龕がん 部、



残ったものだと考えられてい 寺院が廃せられ、 礎の反り花など、 徴をよく示す格狭間や蓮弁、 た笠の形、こじんまりとした龕部の六地蔵尊、 斎宮は神領だったため明治の神仏分離令により、 笛川 室町時代後期の特色をよく示してい , の 中町 すなおな竿石の姿、 、ます。 地蔵院 も廃寺となり、 中 張 台の時代 石幢 ŋ ほとんどの ・ます。 Ó ある基 0 みが .の特

指定されています。 六十二年三月二十七日に、三重県指定有形文化財(工芸品)に 県内では、この時期の六地蔵石幢としては貴重であり、 昭 和

三十三 下郷 (現在の勝見地区) の庄屋、 須賀家・加藤家

が松坂に落ち延び、同伴してきた須賀杢之助が、杢右衛門と改称して須賀家を興し、 寛永九年(一六三二)に熊本城主、 加藤忠弘が領土を没収された際に、 その家臣、 加藤弥五右衛門 江戸時代、 代々

下郷の庄屋をしていました。

また、 加藤家は、 同じく同伴してきた須賀右馬之助 (杢右衛門の弟) が興した家系で、 同家も下郷

の庄屋をしていました。 加 藤家は代々清左衛門を名乗っていましたが、 晚年、 福寿院の僧侶となり、 同院を経営していまし

明治二十二年(一八八九)、同院が廃寺となって以降は農業を営んでいました。

たが、

三十四 明星茶屋

湯を喫すると内外清浄になるという言い伝えがあり、 明 星 茶 屋は、 伊勢街道 の松阪と伊勢の中間 に位置する集団茶屋として街道の名物となり、 参宮する旅人は、 安養寺に立ち寄って茶湯を喫 そこの



このうち三田屋

は、

明 星

茶

屋

0

繁盛を支えてきた茶屋

 \mathcal{O}

0

『伊勢参宮名所図会』 より 明星茶屋

道最 後の茶屋として、 門前は大 1 に賑 わ 参宮者はここで旅の垢を落とし、 V) ました。 また、 伊勢 へ向 かう伊 勢街 旅 装

屋 街 板屋 道筋で明治まで残って 林家などが あ ŋ ました。 1 た旅籠としては、

を整えて伊勢神宮に向

カ

V

ました。

止 宿 で、 と記されています。 伊能忠敬 日 記 に は 櫛 田 河 祓川を測量に来て三田屋に

三田屋

島

安養寺

が 鎌 安養寺は、京都五山の一つ、臨済宗東福寺に属する寺で、伊勢国出身で東福寺第九世だった癡兀大惠 倉時代の永仁五年 (一二九七)、上野字寺屋敷 (現在の済生会明和病院) の地に開山しました。

室町時代には、幕府や伊勢国司の北畠氏から手厚い保護を受けていましたが、天正四年(一五七六)、

安養寺 せた大伽藍」 に 氏 L

北畠具教が三瀬御所で織田方の攻撃によって死んだ後は、 ·衰退したものと思われます。その後、天正十六年 (一五八八)、 郷による伊勢街道の付け替えの影響をうけ、一六三〇年代に現在地 当寺も荒廃 蒲 生

ましたが、 明治元年 (一八六八) 明治十二年(一八七九)に本堂の再興が の廃仏毀釈により、 時、 図られ、 廃寺の運命となり 平成十七

再興されました。

外周 年十月、老朽化に伴う再建が図られていま な の大堀などを確認し、「百間 お、創建時の安養寺跡 は、明和 四方 町が (約 七回にわたる発掘 す。 八〇 $\underbrace{\mathsf{m}}$ 0) 境内 調査

であったという伝承が裏付けられています。

に堀を巡ら

を行

三十六 明星水

旅人の接 安養寺 待に使った安養寺の井戸は明星水と呼ばれ、 の茶湯を喫すると、たとえ不浄垢悪の者でもたちまち内外清浄になるという言い伝えがあり、 明けの明星、 宵の 明星が降臨すると伝えられ

日 のように参詣 安養寺開山の祖、 本三霊 水の一つの名水で、旅人の立ち寄る姿が絶えなかったと言われています。 仏通禅師は、 伊勢神宮両宮の参拝を欠かしたことのない崇敬家で、 ある日い

つも

仏通はその亡骸を背に負って墓地まで運び懇ろに供養してやりました。 に出かけると道端で若い女が年老いた母親の亡骸にすがって泣いていた。 外宮から下向して来ると、 なくなりましたが、近くの川で身を清め、 死骸に触れてしまったのでその日は参拝を遠慮しようと考え、 ある坂道で一人の老人が現れて「自分はこの 改めて両宮を参拝し 女はたいそう喜んだが仏通 哀れ 足が ました。 に思った 進ま

(明星水) 安養寺の井戸

清浄

辺

の

神である女に化けてお前の信仰心を試した。

火徳を授けよう」と告げて消え去りました。

以来、

安養寺の火を使

その赤心奇特に思う。

った湯茶には清めの力があると言われるようになりました。

は

三十七 仲神社

アリ、 仲神社は、『伊勢式内神社社檢録』によれば、「上野村南西二丁ヲ去レル松林ノ中ニ古宮ト稱 東西十間ニ南北廿間許無高 ノ地ナリトソ。 其處ニ在ケル社ヲ東三丁許去ル地へ移セリト言ウ。」 ロスル處



仲神社

祀されましたが、 旧村社は、 とあり、元は現在地より南西約二百メートルの位置にありました。 明治四十一年 (一九〇八) 六月二十一日、 昭和二十年に再び現在地に分祀されました。 櫻神社に合

本殿は神明造。 祭神は神八井耳命です。

三十八 そうめん坂

伊勢街道沿いの明星(下有爾)集落のはずれに、「そうめん坂」の標柱があります。

の女赤根染の裏の付きたる綿着物を、黒茶にちらし形付けぬはひとりもなし、日本にここの女ほど白 この地は、井原西鶴の著書『西鶴織留』に「明野ヶ原の明星茶屋こそおかしけれ、いつとても振袖



そうめん坂

粉を付ける所又となし」とあるように、有名な明星茶屋のあった地域です。 そうめん坂は、明星茶屋の一部に位置し、そうめんやうどんを

出す店が何軒も建ち並んでいたことから、称されていた坂の名で

あることが、今に伝え継がれています。

三十九 転輪寺

5 ものと考えられます。 しま 本尊こそが仏教の十王経で説くところの、冥府で亡者を裁くという転輪王ではなかろうかとのことか 加 古くからここに転輪王が祀られ信仰されていたので、その名称をとって本教寺を転輪寺と改めた したが、元禄 (の能美郡生まれで叡山で修業した本教上人が六十歳の頃、この地を訪れ寺を建立し本教寺と号 :十五年(一七○二)に転輪寺と改められました。これは、御婆さんと言われていた

八 月の盆には、転輪寺住職によって供養されることになっており、また以前には、お堂の前で盆踊

りが盛大に催されていました。

り、 なお、 三門、庫裡、 本堂以外の転輪寺の諸施設として、三門(表門)、 鐘楼・梵鐘は明和町有形文化財に指定されています。 庫 < 裡 、 鐘楼 ・梵鐘、 経堂、 南門などがあ

九 は う人もいます。 「平方メートル)で、屋根 飾り金具を打ち、造りもしっかりしている。」と『明和町史』に記されています。 三門は、「一門一戸薬医門。 遺骨を運び出す門が、今では運び入れる門になっていると先代住職はよく笑っていま の形が変わっていて城内不浄門 本瓦葺起り屋根。もと度会郡玉城町田丸城内の門と伝え、 (死刑者などを運び出す門) 規模は一・四坪 の 親柱の見付に 特徴だとい · 四

した。

開 \Diamond き戸 残 伊 鐘 庫 勢湾 0 楼 裡 たものです。 に は は 台風 は 細 延宝八年 (一六八〇) 元 カコ \mathcal{O} \mathcal{O} 時 本堂で、 11 に 竪棧を入れ、 度、 江 戸 仰 時 向 そ 代 きにひっくり に \mathcal{O} 0 建 腰 創 <u>\frac{1}{1}</u> に花 建。 径 鳥 内 返ったことがあ \mathcal{O} 陣 メー 透 \mathcal{O} 欄 カコ 1 彫 間 ŋ ル に を 嵌^は \mathcal{O} は 梵 鳳 ŋ 鐘 \Diamond 凰 『明星山轉輪寺境内圖』 (まし て は、 \mathcal{O} 南 11 透 7 菛 た 像 い 経 な ま L ず。 ます 堂 彫 が 高六十センチ、台座三十センチ)、 は ん 松 لح ŋ \mathcal{O} 今は を入 が 坂 本尊 カゝ 城 戦 が か 建 は 時 れ 復 て 旧

転輪寺三門 (表門)



銅 造 釈 迦 如 来坐 像

中

 \mathcal{O}

供

出

を

免

れ た

た

飾

り、

その

下

0

両

L

てい

・ます。

立 年代は不明です。

ら移したと伝えられ

四十 オンバサン

明星のオンバサンは、津波で流れ着いたと伝えられています。

り、 転輪寺の東南二百メートルほどの瓦葺のお堂の中に、オンバサンと呼ばれている石像が祀られてお 境内には庚申像、役行者の石像を祀る小祠も建っています。

きたいと告げたので、現在のところに祀ったのだと伝えられています。 地元では、いつのころか、津波によって赤坂に流れ着いたのであるが、 村の人に十王のところへ行



オンバサン

四十一 史跡水池土器製作遺跡

そうめん坂の標柱から明星集落に入り、 二百メートル程行き、 右折道路先に、 史跡水池土器製作遺

跡が あります。

立柱建物四棟、竪穴住居跡三棟、粘土溜二ヶ所、溝一条などであった。このうち、特記すべきものはた。 昭 和五十二年度に発掘調査が行われ、 調査報告書によると、「出土遺構は、土器焼成壙十六ヶ所、

掘っ

史跡水池土器製作遺跡

長さ二・六~四・二メートル、竿大幅一・二~一・八 あるが、いずれも二等辺三角形の平面を持つ土師器の焼成壙であ メートルと大小

た。」と記されています。

重かつ全国で初めてであったので、昭和五十二年七月二十五日、 約

こうした土師器生産に関わる遺構が一括で確認された遺跡は、

貴

九、 見され、 なお、これ以降、 ○○○平方メートルが国史跡に指定されました。 伊勢神宮や斎宮を背景として、 近隣 の遺跡では、 同様 有爾郷が土師器の一大生産 の土師 器焼 成壙

が多数発

地であったことが判明しました。

四十二 街道沿いの営み (下有爾界隈)

生産 大正 が から昭 盛 W に行わ 和に れてい かけて下有爾界隈では、 ました。明星の蘇生の湿 街道付近の農民の大切な生活の糧として、 地には菅が栽培され、住宅地 の近くには竹林 菅笠・菅笠骨 も多く、 0

菅笠の骨を造り、菅笠を縫って製造・販売していました。

また、 明星会館前で酒店を営んでい た鈴木商店は、 味噌、 醤油を扱う商売をしていましたが、 先代

は畳

屋を営んでいました。

戦時

中

までは、

住居は日

畳屋

の造

n



下有爾界隈の街道筋の街並み(山城屋近辺)

もらいに行く人があったといいます。ました。畳屋の時代には、家で直すからと、針と糸をわけてになっていましたが、その後、改修されて酒店の造りとなり

四十三 新茶屋の沿革

生氏 り新茶屋 すると近郊より人 新 郷が 茶 屋付近は、 松ヶ島より松坂に移り、 の地名が起こったとい 古代には明野 々が集まり、 われ が原に接続した荒涼たる原野であったが、天正十六年(一五八八)、 家屋が立ち並び茶屋を始める一方、 城下町を形成してから伊勢街道を改修しました。そして街道が完 てい ます。 原野を耕鋤して生活するようにな 成

に 11 ・ます。 移り住 紀 抓 藩 に仕えた森田六太夫氏昌が、 それらは旅籠や茶屋を営む者が多く、明星茶屋に対し新茶屋として呼ばれるようになりま む者が出て、 宝暦年間 (一七五一~一七六三) には、百五十余りの戸数があったとい 男3人女1人を連れてこの街道筋を開拓したので、 追々この地 われ 7

森 田家 はその後、 旅籠 秋田屋」 を開業しました。 新茶屋にはその他、 泉谷、 七見屋、 熊 ※野屋、 柳

屋、などの旅籠がありました。

た。

履 物 飲 飲食店に 屋 が 立ち並び、 は、 松屋、 遊技場として大弓吹き矢を使って遊ぶところも 中 野 屋、 つぼ屋、 小 柳、 米穀雑貨商、 上村屋、 あ 徳田 りました。 屋があり、 その他、 かじ屋

煙草入れ製造では、 三忠を初め、 瀬古屋、成見屋、 永楽屋がありました。

新茶屋の街道町並み



道標(従是外宮二里)

ると街道筋は押すな押すなのにぎわいを見せて、旅人による銭儲けにて百姓をする人がなかったよう 当時は、「松阪より三里」「古市より三里」という街道最後の集団茶屋で、 誰言うとなしに、「新茶屋長い町・振袖町」と呼ばれ、それだけのんびりした日常生活をして 春の参宮客の来る季節にな

いたようです。

です。

四 十四四 秋田屋事件

あ りました。 秋 田 屋 は、 それはありふれた痴情事件でありましたが、 たまたま起こった秋田屋事件というものをもとにして、芝居に上演されたほどの名門 当時の明星茶屋の盛況振 り、 秋 田 屋 の繁昌 で

カコ ら押して、 大変な騒ぎであったろうと想像します。

仲でしたが、それを快く思わぬ兄手代十右衛門もまたよしに執心でした。そこで十右衛門は一つ 事 \mathcal{O} 顛末は次のとおりです。松坂の干魚問屋の手代九右衛門は、かねてから秋田屋のよしと相愛



秋田屋 (昭和34年頃)

た。

よしのお

歯黒姿を垣間見た九右衛門は、

もう半狂乱となり、

前後

も弁えず飛び込んでよしを刺し、

十右衛門を切ってしまいました。

案に暮れて伊勢に辿りつき、もう一度よしに会いたいと思いました。 ところが丁度その晩が、よしと十右衛門の祝言の日に当たってい いったん桑名の叔父の家を頼りましたが、ここでも相手にされず、 づいて結婚を承諾させました。一方九右衛門は店を追い出された後 ま 思

0

悪

(T)

計をめぐらし、九右衛門に窃盗の罪を着せて店を追い出し、よしに近

四十五 三忠の擬革紙

三忠店頭図(明治時代)

賛され、

大量に輸出されて壁紙などにも使われました。

擬革紙で製作して売り出したところ、

たちまち参宮客の土産等で大流行

その後、

度会、

そ

明治になると擬革紙

はヨーロ

ッパ

アメリ

カの博覧会で絶

他全国でも作られるようになりました。

カッパ

紙

を加工して考案したと伝えられてい

ます。

屋号を三忠と称

当時

流行っていた煙

草入れを

革の

風

合いを紙

で表現し

た擬革紙は、

みしま屋忠次郎

(堀木忠次郎)

が、

貞享元年

(一六八四)、



煙草入れ



パリ博覧会金牌賞状

四十六 田丸城の門

新茶 集落 ごの中 央を通る伊勢街道から南に折れると新茶屋会館があり、 その前の小道を西に百メー

トルほどの右手に標柱があります。

この 城門 には明治 の初め、 この地の堀木家が、いくつかあった田丸城の城門の一つを譲り受けたと伝

えられているものです。

明治四年

(一八七一) に行われています。

城の存在 全国的な城の取り崩しは、明治十年(一八七七)の西南の役の後に、士族の反乱に苦慮した政府が、 に脅威を感じ、打ち出した政策によるものとされています。しかし、 田丸城の取り崩

あ った久野氏が陽に勤皇を唱え、 の事情については、「明治元年、佐幕派と目され苦境にあった紀州藩は、田丸城主で藩 陰に佐幕の策動をしたと流言し、 明治二年に城を取り上げ、 の家老でも 華族

道を断つなど行った。このような田丸城の犠牲の上に、紀州 藩は難局をしのいだ。」とあります。

に及ぶ者もあった。そして、 明治四年に城 は 取り払われた。」とあります。

また、「城の明け渡しに際し、田丸城士達

は、

身命を賭して政府に直訴するなどしたが叶わず、

自刃

堀木家の竹林の入り口門として、ひっそりと佇むこの城門は、南勢随一の名城とうたわれた田



田丸城の門(遠景)



田丸城の門

四 十七 八柱神社

したという。 (一八六七)、社殿を造営しました。八王子社の場所は新茶屋牛場地内現在の寺蔵藪周辺と思わ 江戸 時 代初期、 その後、 慶安元年(一六四八) 宝暦二年 (一七五二) 新茶屋の集落ができたころ、そこに牛頭御厨社を建て産土神と に京都の吉田神社から八王子社の社号を受け、 慶応三年 れます。



八柱神社

た。 れ 社 和三十一年社殿を建立するに 境内に一時遥拝所が設けられ 神社に奉還することになり、 明治二十年(一八八七)には社殿の造営遷宮が執 地 ました。 昭 明治二年(一八六九)の神社改めで、社号を八柱神社と改め、 その後、 和 を整えて鎮座して社殿は本殿から鳥居までの一式 二十年末に八柱神 明治二十一年に神社合祀令により、 社 は 当た が新茶屋 まし 堀木忠太郎宅 た。 り、 0) 現在地 旧 地 へ分祀奉還さ (三忠) (新 祭神 り行 茶 の稲: 屋 が整えら 丸 は わ れ、 岡) 荷 有 れ 神 爾 ま に

昭

桜

社

四 干八 新茶屋の弘法さん

名古屋プロパンの横にある弘法さんは、 道行く人々の無病息災を見守っているか の様に南向きに赤

V 頭 巾をかぶり、前垂れを掛けて静かに鎮座されています。

の波にて菅笠が触れ合うほどにぎわっていました。 伊 |勢街道が開拓された時代に祀られたと思われます。 旅人達は弘法さんに道中の無事と諸々 当時、 この街道は参宮客で押すな押すなの人 0) 願 V 事 を

祈ったことでしょう。



新茶屋の弘法さん

V

ます。

侶 に祈祷をしてもらい、 大正八年 (一九一九) 秋ごろ、 弘法さんを土中に埋めたのが事の起こりで、 何かの出来事で付 近周 辺の人々が僧

だ人も 間 関 0 係 人々を驚かせました。 した人々が次々と急死しました。 いたので、 弘法さんの祟りとして当 それがため、 中には弘法さんの正座姿で死ん 再び掘 時 新 聞 り出して現在 紙上に報道され、 地に ・祀ら

世

れるようになりました。今も新しい花や線香が絶えまなく供えられて

史跡斎宮跡 • 伊勢街道まちづくり会名簿

永島 喬

堀木 茂

倉 辻 田 孝 直 純 雄

> 北村 下村和生 純

茂 子

西岡久美子

木村淑子

桜井可美

生田千

秋

三田正之 須賀恒彦

渡邉幸宏

林

正

剛

(オブザー バ

福田 濱口恵理子(三重県県土整備部景観まちづくり課 由 佳 (松阪地域防災総合事務所) 1

大川

浩

辻 小

美穂

北岡六夫

榎村寛之 大川勝宏 (斎宮歴史博物館 (斎宮歴史博物館

事 務局

明 和 町

·斎宮跡·文化観光課

田所利郎

中 野 敦 夫

乾 哲 也

伊勢街道ものがたり (明和町竹川~新茶屋)

平成 27 年 7 月 31 日 史跡斎宮跡・伊勢街道 編集 まちづくり会

明和町 発行 印刷 光出版印刷株式会社

(順 不同、 平成二十七年三月現在)

乾

秀治

中 森

> 修 健

郎

為島啓之 西